

聖書：ガラテヤ 5：19～22

説教題：御霊の実（一）

日時：2013年6月23日

パウロは、キリストにあつて自由を与えられたクリスチャンは、その自由をどのように用いるべきかについて 13 節から語り始めました。彼が述べたことは、クリスチャンの自由は放縦を奨励するものではないということです。ガラテヤ人は 15 節に記されたように、互いにかみ合ったり、食い合ったりしていました。そうではなく、与えられた自由を喜んで他者に仕える生活に現わすように、そして「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という律法を全うするように、とパウロは述べました。またそのように歩むためのカギは、御霊によって歩むことだ、と 16 節で述べました。私たちの前には二つの道があります。一つは「肉による歩み」、もう一つは「御霊による歩み」。この二つは互いに相逆らう力です。またこれら二つの力から離れて、私たちは自分の思う通りに生活することができません。ですから大切なことは、私たちはどちらの原理によって歩むのかということです。パウロは今日の個所でそれぞれがもたらす「実」について語ります。そしてこのことを良く考えた上で、自分の生き方を選び取るように！と勧めているのです。

まず 19～21 節では「肉の行ない」がリストされています。「肉」それ自体は見えませんが、それは外側の行ないとなって現れて来ます。その外側に現れてくるものによって、自分が、また他人が、肉によって生きているかどうかをチェックすることができるのです。パウロはここで肉の行ないをすべて網羅しているわけではありません。21 節に「そういった類のものです」とありますように、ここにあるのはそのいくつかの代表的なリストであり、私たちはこれらについて考えることを通して、さらに広く適用していかなければなりません。このリストは 4 つの領域に分けて考えることができます。

まず一つ目は性的な罪です。19 節の「不品行、汚れ、好色」の三つです。最初の「不品行」は正式な結婚関係によらない性行為を指しますが、さらに広く適用することができる言葉です。二つ目の「汚れ」は、神が与えてくださった目的から外れたあらゆる不適切また不健全な性の使い方。三つ目の「好色」は男女関係にしまりがなく、恥も感じないほどに不法な性的行為を楽しみとし、これを追い求めることです。性それ自体は神が与えて下さった良い賜物ですが、人間の罪がこれを歪んだもの、倒錯したものに変えてしまいます。異邦人社会における性の乱れは激しく、そこから救われたガラテヤ人クリスチャンの中には、このことについて意識の低い人がいたかもしれませんが、パウロはそれは肉の行ないだとして、まず最初に列挙しています。

二つ目のグループは「偶像礼拝と魔術」、すなわち異教的な罪です。十戒の第一戒に「あなたには他の神々があつてはならない。」とあるように、また第二戒に「偶像を造つてはならない。」とあるように、偶像礼拝は最も根本的な罪です。それは自分に都合の良い神を仕立てることです。二つ目の「魔術」も偶像礼拝に関わります。これは悪の諸々の力をひそかにもてあそぶことであり、簡単にサタンに利用され、サタンに指導されることにつながってしまいます。

三つ目の領域は、教会の交わりを破壊する罪です。「敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、

分裂、分派、ねたみ」がそれです。私たちは罪赦され、救われてもなお、自分中心の性質を持っているため、兄弟姉妹との間にちょっとした違いを見つけると、すぐそのことで敵対してしまう。意見が合わない人と争い始めてしまう。そしてそねむ、すなわち敵対する相手をうらやみ、嫉妬する。また怒る。また党派心を心に抱く。そして相手と競争し、分裂、分派に至る行動を取る。この種の罪は共同体の存立を根底から破壊するものです。これがガラテヤ教会では大きな問題だったのでしょう。

そして4つ目の領域は「酩酊、遊興」。一言で言って、お酒の絡んだドンちゃん騒ぎのことでしょう。異教社会でこういったことは一種のリクレーションとして行なわれていましたし、今日にもそれは当てはまるでしょう。こういう時くらいは少し羽目を外しても許される、と考える。しかしこうした場では容易に「肉」が現われ、横行することは私たちも経験済みのところであり、またすぐに想像がつくことでしょう。

このような肉の行ないをしている者に対して、パウロは言います。「前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」これはこのリストにある罪を一つでも犯したら天国へ入れないという意味ではありません。新改訳聖書が「こんなことをしている者たちが」と訳しているように、これは習慣的にこれらの行ないをし続けている者たちへの宣告です。確かに今ここで神のご支配に従う生活を嫌っている人たちが、どうしてやがて神のご支配が最終的に確立される神の国の中にいることを望むでしょうか。今ここで私たちの生活と、やがての天国における生活との間には、つながりがあります。ですから今ここで神の国に生きていなければ、将来自分がそこにいることについての確信や安心は持てないのです。私たちはこの脅しの言葉に目をさまされ、自分の生活を急いで点検しなければなりません。果たして自分は御国にふさわしくない、御国と釣り合わない生活をし続けていることはないだろうか。肉に突き動かされた生活をし続けているのではないだろうか。この肉の行ないのリストの中で、自分に該当するものは一つもないかどうか。もしあるなら、早急に悔い改めるべきなのです。それは肉による行ないなのです。御霊のものとは対立しているのです。私たちは肉によってではなく、御霊によって歩むようにとされているのです。

では御霊によるなら、どのような「実」が私たちの内に現れて来るのでしょうか。それが22節から示されています。「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」。これら9つはどのように分類することができるでしょうか。ある人は御霊の実としてパウロがあげているのは最初の「愛」であり、その現れとして「喜び」以下の8つが述べられている、と考えます。またある人は三つずつの3グループに分けて考え、最初の三つは神との関係、次の三つは対人関係、最後の三つは自分との関係に関するものだと見ます。またある人は、ここでパウロは御霊の実を教理的に述べようとはしておらず、むしろガラテヤの教会の実情に合わせて（すなわち彼らが互いにかみ合ったり、食い合ったりしている現状に合わせて）、彼らが心に留めるべきことを書いたのだと見ます。学者たちの間でも意見は分かれています。今日は時間の関係上、最初の三つだけを見ることとし、残りの6つは次回見たいと思います。

まず最初は「愛」です。この「愛」という言葉はギリシャ語のアガペーであり、それは人に求め、人から奪う愛ではなく、むしろ人に与える自己犠牲の愛を指します。神は私たちがまだ

罪人であった時、ご自身の大切な一人子の御子を十字架につけるために与えてくださったことにおいて、このアガペーの愛を私たちに示してくださいました。そしてローマ書5章5節に「聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれている」とあるように、私たちの心にこの神の愛を注いでくださるのは聖霊です。その聖霊がこの神の愛を知った私たちの内にも、このアガペーという愛の実を結ばせて下さるのです。パウロは13節で、与えられた自由を肉の働く機会としないで、「愛」をもって互いに仕えなさいと言いました。この愛こそ、ガラテヤ人がまず求めるべきものでした。14節には、律法の全体は「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるからです、ともありました。パウロは1コリント13章では、この愛がなければどんな賜物を持っていても、またどんなに立派な信仰を持っていても、また自分の体を焼かれるために渡しても、何の値打ちもないと言いました。私たちのすることに価値を与えるのは「愛」がそこにあるかどうか、ということです。であるならこの実こそを私たちは祈り求めなければなりません。

二つ目は「喜び」です。これはイエス・キリストにある喜びです。1ペテロ1章8節：「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」これは罪赦された喜び、義と認められた喜び、神の子どもとされた喜び、きよめられる喜び、そして必ず栄光へ至ることを確信する喜びです。またこれは周りの状況によらない喜びです。ピリピ4章4節：「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」1テサロニケ5章16～18節：「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。」この喜びはどれほど私たちの特徴となっているのでしょうか。もしかすると反対にクリスチャンとは、いつも暗い顔をして喜びがあまりない人たち、と周りから思われるような生き方をしてはいないでしょうか。御霊によって生きるなら、「喜び」という実が結ばれて来るのです。そしてネヘミヤ8章10節にあるように、主を喜ぶことは私たちの力となることなのです。

三つ目は「平安」です。聖書における「平安」と「平和」は同じであり、これは神との平和を基礎としています。キリストにあって罪赦され、神との和解を頂くと、私たちの心には大いなる平安がやって来ます。この平安はピリピ4章7節で「人のすべての考えにまさる神の平安」と言われています。これを頂く時に、私たちはいつも思い煩い、騒ぎ立ち、落ち着きのなかった生活から、確信と静けさをもって信頼する生活へ変えられます。そして神との間に与えられる平和は、人との関係にも拡がって行くものです。先ほど見た肉の行ないには、教会の平和をかき乱すいくつもの悪徳がリストされていました。御霊に導かれることによって私たちは人々との間に平和を保ち、これを拡げて行く人へと導かれるのです。

この続きは次回見ますが、最後に御霊の実について二つのことを述べたいと思います。一つは「実」という言葉は単数形であることです。すなわちここにあげられている9つはそれぞれ別々の実ではなく、全体として一つの実であるということでしょう。ですから私たちはこれらの中のいくつかを持てば良いのではなく、全部を持つべきなのです。御霊に導かれるなら、これらすべてが私たちの生活に現われるようではなくてはなりません。もう一つは「実」というものは、時間と共にだんだん大きくなり、熟していくものだということです。ある日突然、立派

なものができわけではありません。ですから私たちは今、自分の内に十分に立派な実が見えなくても必要以上にながかりしなくて良いかもしれない。御霊に導かれているなら、その小さな始まりは始まっているはず。大事なことは、私たちが日々、御霊により頼むということでしょう。私たちは聖霊によって、これらの実を少しずつ大きくし、ついには良く熟したフルーツのように、素晴らしい香りを放つものとして行くことができるのです。

私たちにこのような実を結ばせてくださる御霊は、私たちの内に住んでいてくださいます。私たちはこのことを改めて今夕、感謝したいと思います。またもしこの方を心に留めず、この方を悲しませる歩みをして来たことを思うなら、悔い改めて、もう一度この方に従って歩みたいとの思いを聖霊なる神に告げたい。パウロはこの聖霊により頼む歩みによって、肉の欲望を満足させることはないと言いました。御言葉と祈りにより、また日々聖霊に従う歩みにより、人間のわざとしてではなく、御霊のわざとして、この「御霊の実」が私たちの内に結ばれますように。私たちが「愛」の人、「喜び」の人、「平安」また「平和」の人として益々導かれますように。そしてキリスト者の自由を正しく用いて、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」との律法を全うする者となるよう、聖霊に頼り、祈り、従い、そのように造り変えられる恵みの歩みへ進みたいと思います。